能登殿の最期

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この話の山は、①と③で入れかわる主語、「や・ぞ」の係り結び、そして教経の最期の覚悟**です。

範囲＝能登殿が判官の船に乗り当たる「されども、いかがしたりけん」から、海に入るまで。

あらすじ＝壇ノ浦の合戦で、平家の猛将能登殿（平教経）は源氏の大将判官（義経）をねらって飛びかかるが、判官はひらりと味方の船へ飛び移ってのがれる。もはやこれまでと思った能登殿は武具を捨て、「生け捕りにしてみよ」と呼びかけるが、近寄る者はいない。そこへ大力の安芸太郎と弟の次郎、家来の三人が打ってかかる。能登殿は家来を海へ蹴り入れ、兄弟を両脇にかかえて「死出の山の供せよ」と言い、二十六歳で海に入った。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

されども、いかがしたりけん、判官（はうぐわん）の船に乗り当たつて、「あはや。」と目をかけて飛んでかかるに、判官①かなはじとや思はれけん、長刀（なぎなた）脇にかい挟（ばさ）み、味方の船の二丈（にぢやう）ばかり退（の）いたりけるに、ゆらりと②飛び乗りたまひぬ。能登殿は、③早業（はやわざ）や劣られたりけん、④やがて続いても飛びたまはず。

⑤今はかうと思はれければ、太刀（たち）・長刀海へ投げ入れ、甲（かぶと）も脱いで捨てられけり。鎧（よろひ）の草摺（くさずり）かなぐり捨て、胴ばかり着て、⑥大童（おほわらは）になり、大手（おほで）を広げて立たれたり。⑦およそあたりを払つてぞ見えたりける。⑧恐ろしなんどもおろかなり。

能登殿、大音声（だいおんじやう）をあげて、「⑨われと思はん者どもは、寄つて教経（のりつね）に組んで生け捕りにせよ。鎌倉へ下つて、頼朝（よりとも）に会うて、ものひと言言はんと思ふぞ。寄れや、寄れ。」とのたまへども、寄る者一人もなかりけり。

ここに土佐国（とさのくに）の住人、安芸郷（あきのがう）を知行（ちぎやう）しける安芸大領（あきのだいりやう）実康（さねやす）が子に、安芸太郎実光（あきのたらうさねみつ）とて、三十人が力持つたる大力（だいぢから）の剛（かう）の者あり。我にちつとも劣らぬ郎等（らうどう）一人、弟の次郎も普通には優れたるしたたか者なり。安芸太郎、能登殿を⑩見奉つて申しけるは、「⑪いかに猛（たけ）うましますとも、われら三人取りついたらんに、たとひ丈（たけ）十丈の鬼なりとも、⑫などか従へざるべき。」とて、主従三人小舟に乗つて、能登殿の船に押し並べ、「えい。」と言ひて乗り移り、甲の錣（しころ）を傾（かたぶ）け、太刀を抜いて一面に打つてかかる。

能登殿⑬ちつとも騒ぎたまはず、まつ先に進んだる安芸太郎が郎等を、裾（すそ）を合はせて、海へどうど蹴入れたまふ。続いて寄る安芸太郎を、⑭弓手（ゆんで）の脇に取つて挟み、弟の次郎をば馬手（めて）の脇にかい挟（ばさ）み、ひと締め締めて、「いざ、うれ、さらばおのれら、⑮死出（しで）の山の供せよ。」とて、生年（しやうねん）二十六にて、海へつつとぞ入りたまふ。

語注　されども＝けれども。この前に、能登殿が義経を討とうと源氏の船に次々と乗り移って攻めたが、義経の顔を知らないため、なかなか組めなかったことが語られている。判官＝源義経。あはや＝「それっ」と、事が起こる瞬間に発する声。目をかく＝ねらいをつける。長刀＝長い柄の先に反りのある刃をつけた武器。二丈＝一丈は約三メートル。退く＝離れる。早業＝すばやい身のこなし。草摺＝鎧の胴の下に垂れて、腰から下を守る部分。かなぐり捨つ＝荒々しく取って投げ捨てる。大手＝左右に大きく広げた両腕。大音声＝大きな声。教経＝能登殿（平教経）。自分の名を言っている。頼朝＝源頼朝。義経の兄で、鎌倉にいる源氏の総大将。知行す＝領地として治める。大領＝郡の長官。郎等＝家来。したたか者＝強くてしっかりした者。錣＝兜の左右と後ろに垂れて、首を守る部分。一面に＝いっせいに。裾を合はす＝相手とすそがふれ合うほど近寄る意とも、両足をそろえる意ともいわれる。どうど＝どぶんと。うれ＝相手を見下して呼ぶ語。おまえ。生年＝生まれてからの年齢。数え年でいう。つつと＝さっと。

A　語句の意味と読み（1〜6）

（1）①「かなはじとや思はれけん」の「かなは」の終止形「かなふ」の、ここでの意味を書け。

（2）④「やがて」の意味を書け。

（3）⑥「大童（おほわらは）」とは、どのような姿か。書け。

（4）⑧「恐ろしなんどもおろかなり」の「おろかなり」の意味を書け。

（5）⑬「ちつとも騒ぎたまはず」の「ちつとも」の意味を書け。また、この語はどのような語と組み合わせて使われるか。

（6）⑭「弓手（ゆんで）」は、左右どちらの手（脇）か。また、本文中でこれと対になる語を抜き出し、その読みと意味を書け。

B　文法（7〜12）

（7）①「かなはじとや思はれけん」の「じ」の文法的意味を書け。

（8）②「飛び乗りたまひぬ」の「ぬ」の文法的意味と活用形を書け。

（9）③「早業（はやわざ）や劣られたりけん」の係助詞「や」の結びの語を抜き出し、その文法的意味と活用形を書け。

（10）⑤「今はかうと思はれければ」の「かう」は、どの語がどのような音便になったものか。また「思はれ」の「れ」の文法的意味を書け。

（11）⑦「およそあたりを払つてぞ見えたりける」の「ぞ」の働きを答え、結びの語とその活用形も書け。

（12）⑪「いかに猛（たけ）うましますとも」の「猛う」はどの語のどのような形か。また「とも」の働きを書け。

C　主語・指す内容・敬意の方向（13〜17）

(13) ①「かなはじとや思はれけん」で、「かなはじ」と思ったのは誰か。また、それは誰に対してか。

(14) ②「飛び乗りたまひぬ」の「たまひ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(15) ③「早業（はやわざ）や劣られたりけん」で、早業が劣っていたのは誰か。また、誰と比べて劣っていたのか。

(16) ⑩「見奉つて」の「奉る」の敬語の種類と、誰から誰への敬意かを書け。

(17) ⑪「いかに猛（たけ）うましますとも」の「ます」は、誰から誰への敬意を表しているか。

D　口語訳（18〜21）

(18) ⑦をふくむ「およそあたりを払つてぞ見えたりける」を口語訳せよ。

(19) ⑨をふくむ「われと思はん者どもは、寄つて教経（のりつね）に組んで生け捕りにせよ」を口語訳せよ。

(20) ⑫をふくむ「たとひ丈（たけ）十丈の鬼なりとも、などか従へざるべき」を口語訳せよ。

(21) ⑮をふくむ「いざ、うれ、さらばおのれら、死出（しで）の山の供せよ」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）①「かなはじとや思はれけん」のあと、判官（義経）はどのような行動をとったか。本文に即して書け。

（23）⑤「今はかうと思はれければ」とあるが、このあと能登殿が太刀・長刀を海へ投げ入れ、兜も脱ぎ捨てたのはなぜか。その行動にこめられた気持ちにふれて書け。

（24）⑧「恐ろしなんどもおろかなり」とあるが、何がどのように恐ろしいのか。書け。

（25）⑮「死出（しで）の山の供せよ」と言って海に入った能登殿の最期は、どのような点で武士らしいといえるか。書け。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『平家物語』の文学のジャンル、成立した時代、どのようにして広く伝えられたかを書け。

（27）この場面は、何という戦いの中の出来事か。また、その戦いで平家はどうなったか。

（28）「能登殿」と「判官」は、それぞれ誰のことか。平家方・源氏方の別もあわせて書け。また、義経が「判官」と呼ばれる理由も書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「や〜けん」「ぞ〜ける」は連体形で結ぶ。③「劣られたりけん」⑦「見えたりける」は連体形。結びの語と活用形をセットで答えられるようにしておく。 **❷「かなはじ」と思ったのは判官（義経）**、「早業や劣られたりけん」は能登殿。①と③で主語が入れかわるところを取りちがえると連続で失点する。 **❸弓手＝左、馬手＝右／死出の山の供せよ＝あの世への道連れになれ。**⑭⑮は語句・口語訳・記述のどれでもそのまま出る。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　▸ 解説記事にもどる